「幼き人」竹取翁礼讃の書

――『竹取物語』の主題と方法――

妹尾好信

はじめに

言うまでもなく、『竹取物語』は、わが国の物語文学史上最初の作品としてことに著名な作品である。作者はもとより、成立年代についてもはっきりしたことはわからないが、九世紀後半頃までの成立であることはほぼ間違いない。ただし、室町期以前に遡る古写本が現存しないことから、現行の本文がどれほど成立当時の姿をとどめているかはいささか疑問のあるところである。が、それにしても、名実ともに物語の祖たるこの作品が千百年もの時空を超えて、今日まで連綿と伝えられてきたことは驚嘆に値することだと言えよう。これはひとえに『竹取物語』の文学作品としての魅力、つまりいかなる時代の読者に対しても感動を与えることのできる普遍的な魅力ゆえであろう。もちろん、その魅力は読者一人一人にとって、それぞれ別様である筈である。百人の読者がいれば百通りの読み方ができる。しかもそれらがいずれも深い感銘をともなっている。価値ある古典とはそういうものであろうから。

したがって、これから述べることは、私にとって『竹取物語』とはいかなる作品かということであって、無数にあると思われる読み方のうちのひとつに過ぎないものである。それがこの作品の本質をどれほどとらえ得ているかは、大方の御批判を仰ぐことにしたい。

一、主人公は誰か

まず、現在一般に「竹取物語」と呼ばれているこの作品の書名についてであるが、はたして正式な書名はどうであったのだろうか。この物語について触れた最も古い文献は『源氏物語』であるが、有名な絵合巻の記事には、「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」（傍点筆者）とあり、また蓬生巻には「かぐや姫の物語」とある。これにより、「竹取翁（物語）」「かぐや姫の物語」両様の呼称があったことが知られるが、現存する諸本はすべて「竹取物語」ないし「竹取翁物語」であることから、「かぐや姫の物語」は便宜的な呼称であり、また「竹取物語」は「竹取翁物語」の略称であろうから、正式な書名は「竹取翁物語」であったろうと考えられている。[注1]

ところが、「竹取翁物語」が正式書名だということになると、三谷栄一氏が言われるごとく、「『かぐや姫のものがたり』という名称は、この作品を読むかぎり、彼女が主人公であることから理解できるのだが、『竹取の翁』という題名は単に作品を読んだだけでは理解しがたい命名といわざるをえない」[注2]という疑問が生じてくる。そこで諸注は「竹取翁」なる語が持っている意味や背景についての考察にはいるわけであるが、もしこの書名が作者自らの命名であるとするならば、作者はこの作品の主人公はかぐや姫ではなく竹取翁

であることを暗示しようとしてこのような書名を付けたのではないだろうか。

確かに物語の構成からは、主人公はあたかも出生から昇天までが描かれるかぐや姫であるように見える。しかし、もう少し注意して読んでみると、竹取翁の方がかぐや姫よりもはるかに個性的でいきいきと描かれていて、終始舞台に登場して活躍していることがわかるであろう。かぐや姫はいかにも主人公然として、中心に坐してはいるが、それだけで大した動きもみせないし、性格的にもはっきりした個性を持たない人物なのである。今さら改めて平安朝物語の題名と主人公の関係をあげつらうまでもないと思うが、『落窪物語』と落窪の君、『源氏物語』と光源氏、『狭衣物語』と狭衣の大将、『寝覚物語』と寝覚の上、また『伊勢物語』の異称である『在五が物語』と業平、『平中物語』と平貞文など、人物名や称号が書名となっている場合は、ほぼ例外なく主人公のそれなのである。脇役の名をもって命名された物語などというのはまずない。したがって、「竹取翁物語」という書名を与えられたこの作品の主人公は、やはり竹取翁であると考えなければならないと思うのである。

二、竹取翁の人物造型

それでは、主人公たる竹取翁は、具体的にどのように描かれ、主人公にふさわしい人物造型がなされているかということを考えてみよう。先に、翁はかぐや姫よりもはるかに個性的でいきいきと描かれていると述べたが、それはどういう点に顕著に現れているかということを、叙述に即して見ていこうと思うのである。

I、登場――洒落っ気のある人物

『竹取物語』の冒頭は、「いまは昔、竹取の翁といふもの有りけり。野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使ひけり。名をばさかきの造となむいひける」（二九頁）と、竹取翁の紹介から始まる。[注2]『宇津保物語』俊蔭巻、『落窪物語』巻一、『源氏物語』桐壺巻等の冒頭がいずれも主人公の親の紹介から筆を起していることから、これも主人公たるかぐや姫の父親を紹介し、主人公の誕生に筆を進めようとしたものだとも考えられる。しかし、「昔、男ありけり」ではじまる『伊勢物語』や、『平中物語』など、直接主人公の紹介から始まる物語の冒頭もあるから、このために竹取翁が主人公でありえないというわけのものではない。

さて、翁はある日、根元の光る一本の竹を見つけた。よく見ると、筒の中に「三寸ばかりなる人」がかわいらしい姿で坐っているのであった。そこで翁は言う。「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子になり給ふべき人なめり」と。この独白が、翁の物語中最初の発言である。ここで、諸注指摘するところであるが、この科白がいきなり痛快な駄洒落であることに注意しなければならない。翁は、「野山にまじりて竹を取りつゝ、よろづの事に使」っていたが、代表的な竹製品は籠類である。つまり、翁にとって竹は籠になるべきものであった。だから、竹の中にいた少女は子になるべき人だと洒落たわけである。こういう駄洒落をとっさに思いつき、それを他に誰もいない竹林の中で堂々と口にする、翁はそういう人物としてまず登場してくるのである。これだけで翁は相当洒落っ気のある人物として、読者に強烈な印象を与えるのである。この手の駄洒落はこの物語作者の得意芸で、あちこちにちりばめられているが、ここでは起筆早々、登場人物の第一声の中にいきなり使われていることを重視したい。竹取翁の人物造型上、作者の

意図した技巧と考えられるのである。

Ⅱ、オーバーな反応

次に、竹取翁の性格を顕著に示す事例のひとつとして、対話における大げさな反応が挙げられよう。翁の重要な役割として、かぐや姫と直接対話し、五人の求婚者をはじめとする他の登場人物たちとかぐや姫との仲介役がある。したがって、翁にはいきおい対話場面が多くなるのであるが、その随所に必要以上にオーバーな反応というべき表現が見られるのである。とりわけそれはかぐや姫の提案や意見に対してよく現れる。二、三の例を挙げてみると、

「うれしくものたまふ物かな」（三二頁）

「思ひのごとくも、のたまふ物かな」（三二頁）

「それ、さも言はれたり」（四四頁）

といった具合である。翁としては、姫の発言に心から同調・理解を示そうとして、精一杯強い表現をしているのであろうが、いささか滑稽にも思える反応ぶりである。しかし、これも翁の愛すべき性格造型と言ってよいであろう。かぐや姫の提出した難題を伝えるため、五人の求婚者に対面した時、翁は、「かたじけなく、きたなげなる所に、年月をへて物し給ふ事、極まりたるかしこまり」（三三頁）云々と挨拶しているが、これも単に身分の高い相手に対する儀礼的な謙辞ではなく、本心から求婚者たちに同情の念を抱き、ねぎらう気持ちを現した、いささか大げさな表現ととることができるであろう。

Ⅲ、数量に関する誇張表現

対話におけるオーバーな反応というのも一種の誇張表現であるが、竹取翁の発言には、さらに特異な誇張表現が見られる。いわば数量に関する誇張表現である。

ひとつの例は、かぐが姫に五人の求婚者のいずれかと結婚するよう説得する場面で口にする「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず」（三二頁）という発言である。姫の庇護者である自分は老齢であるゆえ、早く結婚してしかるべき後ろ楯を得ておかないと、もし自分が死んだら、姫は路頭に迷うことになるぞとの脅し文句であるが、実はこの翁の年齢、大変な誇張なのである。後にかぐや姫の昇天の日が間近に迫った場面で、悲嘆のあまりやつれ果てた翁の姿を描写して、「翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ふには、かた時になむ老になりにけると見ゆ」（六〇頁）とある。作者（注4）ば、七、八年経った後の時点で、翁の年齢は五〇歳ほどだと言っているのであるから、この時、翁の年齢は四〇歳そこそこということになる。四〇歳を過ぎておれば、当時としては「翁」と呼ばれるのはそれほど不自然ではないであろうが、それにしても自分の齢を三〇歳も誇張して言うとはあんまりである。それゆえ、これは前後成立の次元が異なるために生じた矛盾であるとする片桐洋一氏のような意見もあるが（注5）、やはり翁の思い切った誇張表現と解すべきであろう。翁はかぐや姫が結婚に踏み切ってほしいばかりに、こういう極端な嘘をついたのである。

第二の例は、かぐや姫が自らの出自を明らかにし、昇天の日の近いことを翁に告白した場面で、愕然とした翁は次のように言う。

「とは、なでふ事のたまふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈たち並ぶまで養ひたてまつりたる我子を、なに人か迎へきこえん」（六〇頁）。「菜種の大きさ」というのは微小なもののたとえではあろうが、文字通り「けし粒ほ

どの大きさ」[注6]ということであるなら、せいぜい数ミリ程度ということになる。実際には翁が竹の中にかぐや姫を見つけた時は三寸ばかりあった。これも、いかに小さかったかぐや姫を大きく育てたかということを大げさに表現した発言だと考えられよう。

同様の例はもうひとつある。昇天の場面で、天人の王に、かぐや姫は翁の功徳の報として片時の間遣わしたのであるから今は早く返せと言われ、翁はこう答える。「かぐや姫を養ひたてまつること廿余年に成りぬ。かた時との給ふにあやしく成り侍りぬ。又異所に、かぐや姫と申す人ぞおはすらん」（六四頁）。自分が養っているかぐや姫はもう二〇年も一諸にいるのだから、天人が求めているかぐや姫とは別人だと主張しているわけである。天人が「かた時」と言った言葉尻をつかまえてうまい具合にとぼけてみせたわけであるが、この「廿余年」というのも大変な誇張である。翁がかぐや姫を見つけてからは、七、八年かせいぜい一〇年ほどしか経っていない筈である。[注7]姫はわずか三か月で一人前の女性となったのであるから、それから普通の速度で齢をとったとしても、二十余年も経っていれば、もうこの時には四〇歳ほどにもなってしまう。実際にはこの時、普通の人間の女性として二十数歳の年恰好といったところであろう。[注8]片桐氏が言われるように、これは直後の『ここにおはするかぐや姫は、重き病をしたまへば』と同じく、かぐや姫が天人でなく、ふつうの子女であることを強調するための、翁の嘘言」とも考えられようが、これもかぐや姫を守りたい一心から出た翁一流の誇張表現と見ることも可能であろう。

三例とも、あまりに極端であるため、かなりみえすいた嘘になってはいるが、いずれもかぐや姫に対する深い愛情から発した懸命な誇張表現であり、愛すべき翁の人柄を鮮明にする効果を有しているであろう。

Ⅳ、動作の具体描写――「～をり」の多用

竹取翁の人品が最もいきいきと描かれているのは、難題求婚譚のうち、二番目のくらもちの皇子が蓬萊の玉の枝と称していかにもそれらしい立派な枝を持って来たときの描写（三六～四〇頁）であると思う。

翁は、皇子が自邸にも寄らずやつれた旅装束のままで玉の枝を届けに来たことにまず感動し、大喜びで姫の部屋に「はしり入」る。そして、「なにをもちてとかく申すべき」「はやこの皇子にあひ仕うまつり給へ」と、早くも姫の結婚成立とばかり、皇子が図々しく縁にはい上って来ても「理に思」って、喜々として翁自ら「閨のうち、しつらひなどす」る有様である。

あまりに気の早い決め込みようであるが、翁は姫が一刻も早く結婚することが、姫にとっても自分にとっても最高の幸福であると信じて疑わず、今や嬉しさで有頂天になり、姫の悲嘆の様子など全く目にはいらぬのである。それゆえ、くらもちの皇子の苦労に対する同情、ねぎらいの気持ちも強く、嘘八百の冒険談に心底感動して、生涯ただ一作と思われる歌などを詠んだりする。

そこへ皇子に雇われていた六人の工匠たちがやって来て、姫に禄を求める。翁は初め、「この匠が申すことはなに事ぞと傾きをり」（傍線筆者、以下同じ）といぶかっていたが、やがて皇子の持って来た玉の枝が真っ赤な偽物であることが判明すると、「さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむ事いとやすしとうなづきてをり」

と、即座に納得し、姫の意見に従う。そして、「さばかり語らひつるが、さすがに覚えて、眠りをり」と、あまりにはしゃぎすぎたもので気まずくなり、立場が悪いとみると、空とぼけて狸寝入りを決め込むのである。

このあたりの竹取翁の言動の描写は、まさに圧巻である。三谷栄一氏も、この一連の場面の叙述を、「何と言ってもこの翁の描写が中心といってよいほどうまく描かれている」、そして「作者はなかなかの力量であり、しっかりした構成力を示している」と絶讃しておられる。[注9] こうした翁の一挙手一投足を逐一具体的に描写しているのは、作者がいかに翁に重要な役割を与えているかを如実に示すものと言えよう。

もう一つ、竹取翁が人々の先頭に立って頑張るのが、昇天の段で、朝廷から派遣された武士たちとともに天からの迎えを待ちうける場面（六一～六二頁）である。翁は「かばかり守る所に、天の人にも負けむや」と自信満々、屋根の上の武士たち[注10]と大声で声をかけ合い、「翁、これを聞きて頼もしがりをり」とたくましい。

かぐや姫が天人と戦うことの不可能を説き聞かせても、翁は、「『御迎へに来む人をば、長き爪して、眼をつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出でゝ、こゝらの公人に見せて、恥を見せん』と腹立ちをる」と、ひたすら勇敢である。あまり下品なことを言ったものだから、「こわ高になのたまひそ。屋の上にをる人どもの聞くに、いとまさなし」と、逆に姫にたしなめられたりしている。それでも翁は、どんなことがあっても姫を渡すものかと懸命で、「『胸痛きことなしたまひそ。うるはしき姿したる使にも障らじ』と、ねたみをり」と意気軒昂である。

天人が現れて、いよいよ武力は通じないことがわかっても、翁は、先にも触れたように、空とぼけたり、みえすいた嘘を言ったりして必死で姫を守ろうとする。読者はその懸命な姿に心打たれるが、翁の言動にはつねにユーモラスなところがあって、緊迫した場面にもどこかほのぼのとしたものを感じさせる。全く魅力ある憎めない人柄なのである。

ところで、ここでひとつ注目したいのは、先の引用文で傍線を施したような「をり」の使用である。「傾きをり」「うなづき（て）をり」[注11]「眠りをり」「腹立ちをる」[注12]「ねたみをり」と、竹取翁の動作には動詞に接続した「をり」が頻繁に用いられている。のみならず、『竹取物語』において、「～をり」という表現は、実は翁の言動に関してしか用いられていないのである。ただ、火鼠の皮衣の段で、あべのみむらじが唐土から取り寄せた立派な皮衣を持って来た場面に、「この度はかならずあはむと、女の心にも思ひをり」（四三頁）とあって、ここでは女（嫗）が主語になっているが、「女の心にも」とあることにより、この表現の裏には翁がいること明白である。つまり、「今度ばかりは気の早い翁だけではなく、慎重な嫗の心にも」という意味であって、当然翁も「思ひを」るのである。

これは明らかに作者が意図して翁の言動に関して「～をり」という表現を多用したものと思われるが、翁の人柄をいきいきと表現するのに大きな効果を挙げていると言えよう。『広辞苑』（第三版）によると、「をり」が他の動詞の連用形につく場合、単に動作・状態の継続を表わす意の他に、第二項目として「自己を卑下し、また他人の動作をさげすんだり、さらにはののしったりする意を表わす」とあり、『万葉集』・『枕草子』・狂言「富士松」の用例を挙

げている。確かに「〜をり」を使うと、卑下ないしは蔑視した表現となることもあるのだろうが、『竹取物語』においては、とくに翁を蔑視しているというよりも、その少々単純だが憎めない善人ぶり[注13]を表現するものとして利用されていると見るべきではなかろうか。「さが尻をかき出でゝ」云々というような猥雑な言葉を吐く翁の野卑な一面ともマッチした表現ということもできよう。作者は、文体の面でも竹取翁の描写には特に力を注いでいるわけである。

三、「幼き人」の意味するもの

以上のように、『竹取物語』の作者は、翁に対して特別の思い入れを込めて描写しており、事実上、かぐや姫をしのいで物語の主人公たるにふさわしい活躍をさせているわけであるが、その性格造型は、一言で言ってしまえば一本気で単純だが、「限りなき善人」としての翁である。人を疑うことがなく、同情心に富み、心の暖い、たとえ失敗をしても憎むことのできない人柄である。感情の表出も素直で、ときにはおろおろし、またときには勇気をふるい起こす。そして、いくら財力が豊かになっても、おごり高ぶることを知らない無垢な人間であり、他人に対してはつねに低姿勢に出る。竹取という身分の賤しさがそうさせたと言えばそれまでであるが、かと言って翁は決して卑屈になってはいない。成り上がり者はえてして財にたのんで傲慢になるか、反対に卑屈で天の邪鬼になるかしがちなものだが、翁はどちらにもならず、誰に対してもつねに好々爺であった。だから、物語中で竹取翁は誰にも妬まれたり恨まれたりしてはいない。大伴のみゆきは竜の首の玉を取るため自ら海上に乗り出し、さんざんな目に合って、「かぐや姫てふ大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり」（四九頁）と悪態をついているが、竹取翁はこのように人にののしられたりすることは全くないのである。そして、「限りなき善人」たる翁は、その単純さ、無垢さから一種の子供っぽさを有しており、それがまた独特の人間的な魅力となっているのである。

さて、そういう竹取翁に対する作者の性格付与を、端的に一語で言い表わしている言葉が物語中にある。それは、姫の迎えに現れた天人の中の「王とおぼしき人」をして翁を呼ばしめた「汝、をさなき人」（六三頁）という言葉である。[注14]作者が精魂こめて描いた翁の姿は、まさに「幼き人」としての翁であったと言えると思うのである。

すでに上坂信男氏は、この「幼き人」の語をこの作品のキー・ワードとして注目され、「『幼なき人』というのは、俗気紛々として超俗悟達の境に程遠い、精神年齢の低いものという意味あい」であって、「命尽きた者の死に直面して、なお未練を抱いたり、不必要なまでの世俗的繁栄を願うことの愚かしさを分別できない者が、まず、天人のいう『幼き人』である」と述べられた。[注15]そして、「結局、この作品を通して、作者は『幼なき人』と『大人しき人』との区別の基準が奈辺にあるか、つまりは、人間にとって、人生にとって、世俗的欲望の追求と世俗を超えるものへの志向とどちらに大きな価値を認めるべきであるかを、この物語を読む者・聞く者に考えさせようとしているように受け取ることができる」と結論された。上坂氏は、この「幼き人」という言葉を否定的に受け取られ、作者は反対に「大人しき人」たるべく志向せよと説いているのだと言われるのである。が、果たしてこれはいかがであろうか。この語を作品のキー・ワードとして捉えるなら、単に昇天の場面だけでなく、

物語全体を通してその意味を考えてみなければならないのではなかろうか。

竹取翁は、決して名誉・地位・財産など世俗的な欲望に拘泥してはいない。与えられた富は素直に享受するけれども（姫の命名式の後、三日間にもわたる大饗宴を開いたり、屋根と築地の上に二千人もの武士が乗ることのできる大邸宅を造営したりしたのはそのためである）、決して与えられる以上の世俗的利益を追求しようとはしていないのである。帝から、「この女もし奉りたるものならば、翁に冠を、などか賜はせざらん」と言われた翁は大喜びするが、かぐや姫がどうしても入内させるなら死を選ぶと言い張ると、たちまち「官冠（つかさかうぶり）も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ」と加冠の望みをあっさり棄ててしまう。翁にとっては、世俗的利益よりもかぐや姫の身の方が、広く言えば人間関係の方が大切であったのだ。むしろ、人間関係の大切さに比べれば、世俗的利益など問題ではなかったと言えよう。先にも述べたごとく、翁がつねに他人に対して控え目に出、憐みと同情の心をもって接しているのも、この人間関係を大切にする姿勢ゆえと考えられる。作者は、そういう翁の人間的な暖かさを讃美していると考えた方が自然ではないであろうか。

こう言うと、逆説めくが、つまり、「幼き人」というのは、作者の翁に対する讃美の言葉なのである。さらに言えば、作者は竹取翁を描くことによって、人間はすべて「幼き人」であるべきだと説いているのであろう。世故にたけ、世俗社会での身の処し方をわきまえ、現世利益のうまい追求法を知ってとりすましている海千山千の人間こそ、いわば「大人しき人」として軽蔑されるべきだというのである。いわゆる「大人しき人」は本来あるべき人間性をもった人間ではない。翁のような「幼き人」にこそ、真に人間の持つべき、素朴で暖かい心があるというのである。

この「幼き人」という語は、『大和物語』第一四八段、例の蕈刈説話の段にも見えるが、そこでは、物を与えようとしているのに恥じて逃げ回る男に向かって、使いの者が「なにのうちひかせ給ふべきにもあらず。ものをこそはたまはむとすれ。幼き物なり」（注19）と言っている。ここでも、世俗的な利益を自ら拒否して逃げる態度をさして「幼き者」と言っていることが注目される。決して世俗に拘泥した姿を言っているのではない。

それを言うよりも『竹取物語』の中に、もう一例「幼き者」の用例がある。入内をすすめるために竹取の家を訪れた勅使に、かぐや姫がどうしても応じない旨を伝える嫗の言葉に、「くちをしく、このをさなきものは、こはくはべるものにて、対面すまじき」（五四頁、傍点筆者）というのがある。ここではかぐや姫が「幼き者」と呼ばれているわけだが、常識的に考えると女性にとって現世最高の栄誉である立后につながる入内を拒否する姿をさして「幼き者」と呼ばれているのである。これも世俗の利益に執着する姿勢とは対極にあるものである。こう考えると、この嫗の言葉は、『竹取物語』の主題を考えるうえで極めて暗示的であると言えよう。

ところで、この「汝、幼き人」という言葉が天界の使者の口から発せられていることは、やはり天人と地上の人間との対峙ということを考えぬばならないであろう。それは、上坂氏も述べられたごとく、かぐや姫が帝と翁のために残した不死の薬への対処法によって窺われると思われる。

上坂氏は、かぐや姫が残した不死の薬を翁や帝が飲まなかったの

は、彼らに超俗を期待した姫の気持ちを理解しえず、地上界に妄執してしまった愚かな行為だと説かれるのであるが、作者はそういうふうに描いてはいないのではないか。天の羽衣と不死の薬は、地上界と天界とを隔てる証しとなるものである。天の羽衣を着ると「心異にな」り、「翁をいとほしく、かなしと思しつる事も失せ」てしまう。また不死の薬は、天人にとって「穢き所」すなわち地上界の汚れを取り除く作用をするものである。かぐや姫にすれば、恩義ある翁や帝に不死の薬を残して、それによって天界の人と同様、物思いのない永遠の人生を生きてほしいと願ったのであろうが、もしここで翁らが不死の薬を飲んでしまえば、彼らは「人間」を捨てることになる。人間が人間であることを放棄して、なおかつ昇天もできずこの地上界に生きんとしても、そこに理想的な人生があろう筈はない。人類永遠の憧れである不老不死の薬をあえて放棄したのは、人間性を捨ててまで永遠の寿を得ても空しいことを悟ったからである。それがたとえ最愛のかぐや姫を失った悲嘆のあまり、無意識のうちに行われた選択であったにしても、それはやはり彼らの人間性がそうさせたのである。

翁は賢かった。帝もまた賢かった。彼らは人間であることを何よりも大切にした。天界の人から見れば「幼き人」にすぎない翁が、最も人間らしい人間であった所以がここにもある。そしてまた帝も、最高の権力の座にありながらも、かぐや姫との関わりを通しては、翁ほどではないにしろ、多分に「幼き人」であったことを知るのである。

「幼き人」こそ人間である。世俗的利益に妄執する有象無象でもなく、また超俗・永遠の解脱を求める悟りすました聖人でもない「幼き人」こそ、このうえなく魅力ある人間なのだと、作者は竹取翁の姿を描くことによって読者に訴えたかったのであろう。

おわりに

『竹取物語』の作者が誰であるかは、今となっては知るべくもないが、大変な知識人であったことは確かである。しかし、権門勢家に生まれた上流貴族ではあるまい。社会的栄達の道からはずれた斜陽貴族の出身者であろうと考えられる。そして、当時の権力者の世の中を縦横恣に操る傲慢ぶり、あるいは権力者におもねることにあくせくする周辺の中下級貴族たちの世俗への妄執ぶりを見るに見かねて、人間にとって真に大切なものは何か、世俗的欲望を超えた素朴にして暖かい人間性ではないかという強い主張を、この幻想的かつドタバタ喜劇風の作品に託したのだと言えるであろう。五人の求婚者たちの描写には、世俗・権力への痛烈な揶揄が、天界の使者との対峙においては、人間性の本質に向けられた真摯な眼が窺われるのである。そして、全体にわたって歯切れよくユーモラスな文体が、そういうこの作品の重大な主題をオブラートのごとくやさしく包んで、親しみ易いものにしているのである。

『竹取物語』が文学史上に重要な作品として千有余年もの命脈を保って来たのは、単に「物語の出で来はじめの祖」であるからというのではなく、このように人間性の本質を問題にした作品だからなのである。そして、人間の世俗への妄執がなくならない限り、『竹取物語』は未来永却いつまでも読まれ続けていくことであろう。私にとって、『竹取物語』とはそういう作品だと思われるのである。

――広島大学文学部助手――

〔注〕

1、片桐洋一氏、日本古典文学全集『竹取物語』（小学館　昭四七）解説。

2、三谷栄一氏、鑑賞日本古典文学『竹取物語・宇津保物語』（角川書店　昭五〇）総説。

3、『竹取物語』本文の引用は、すべて日本古典文学大系『竹取物語』（岩波書店　昭三二）による。但し、漢字の字体、表記等は一部改変した。引用文の後に付した頁数も同書のものである。

4、吉池浩氏は、この時の翁の年齢を四六歳とされた（「竹取の翁の年齢と物語の構成」『国語国文』昭三一・五）が、井上英明氏は、四二歳とされた（「竹取物語の時間的構成」『平安朝文学研究』第七号　昭三七・一）。概ね井上説に従いたい。

5、注1掲出書頭注。

6、注3掲出書頭注。

7、注4掲出の井上論文によると、この間八年で、昇天時のかぐや姫の年齢は二一歳ということになる。

8、注5に同じ。

9、注2掲出書に同じ。

10、日本古典文学大系の底本である武藤本は「たのもしかりけり」。吉田幸一氏蔵本等の異文をとる。

11、吉田幸一氏蔵本等は「て」なし。

12、古活字十行甲本等は「腹立ちをり」。

13、『岩波古語辞典』は、「《蔑視の意をこめて》いる」として、「翁もぬりこめの戸をさして戸口にをり」という『竹取物語』の用例を掲げている。これは「をり」が単独で用いられたものだが、蔑視の意をこめるというのはいかがなものか。

14、この「汝、をさなき人」の解釈に関しては諸説がある。「をさなき人」をかぐや姫のこととする説（たとえば角川文庫本）もあるが、とらない。翁に対する呼びかけと解するのが妥当と思われる。その辺りの事情については、奥山誉男氏「竹取物語『汝をさなき人』考」（『平安文学研究』第一五輯　昭二九・六）参照。

15、講談社学術文庫『竹取物語全訳注』（講談社　昭五三）解説。これより早く、『古代物語の研究――長編性の問題――』（笠間書院　昭四六）にも同内容のことが説かれている。

16、引用は、日本古典文学大系『大和物語』（岩波書店　昭三二）による。傍点筆者。

（昭和五九年五月稿）

〔付記〕本稿は、昭和五四年一月に私的な文集に書いたものを土台にして、大幅に改稿して成稿としたものである。当初より御指導賜った稲賀敬二先生に、記して厚く御礼申し上げる。